THE DAILY NEWS
KOBE 2024 PARA ATHLETICS WORLD CHAMPIONSHIPS
Tue 21 May
DAY 5
Japanese

Yesterday's Highlight

若い選手とベテランがともに躍進

神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会4日目は前日の雨から一転、朝から青空が広がり、気温も上昇、初夏らしい気候となった。学校観戦の児童・生徒たちの声援も響くなか、2つの世界新記録をはじめ、大会新記録やエリア記録などが多数、誕生した。

■ T20女子400m

大会4日目に誕生した世界記録2つのうちの1つは、T20女子400m決勝で樹立された。19日に17 選手が出場した予選を経て、8人が進出した決勝レース。前回パリ大会の金、銅メダリストなどもいるなか、号砲から積極的に飛ばしていったのはインドのディープティ・ジヴァンジだ。レース序盤からスムーズな加速で先頭に立ち、そのままフィニッシュ。マークした55秒07は従来の世界記録を0秒05更新する快走だった。昨年のアジアパラ競技大会の金メダリストで、19日の予選で自身が更新したばかりだったアジア新記録（56秒18）も大幅に更新した。

「アジアパラに続いて、優勝できて嬉しいし、世界新記録も出せて幸せです。パリでも金メダルを獲りたいです」と話した。

日本の菅野新菜は、日本記録を0秒2更新する59秒22をマークして7位。前日の予選レース後は「失敗があった」と悔しさをにじませており、決勝レース前には、「昨日のような失敗はしたくないと、怖くて怖くて逃げたくなった」という。「でも、スタートに立った時は自分の気持ちと勝負して、『負けないぞ、周りの選手のペースに食らいつくんだ』と思えた。逃げなかったことが自己ベストにつながったと思います」と笑顔を見せた。

優勝したジヴァンジとは以前にも国際大会で一緒に走った経験がある。「すごく強かった。今日も速くてビックリしながら、追いかけました」。次の目標を聞かれ、「走り方やスタートダッシュを強化して58秒台を目指したいです」。今後も、一歩ずつ自身のペースで成長を続けるだろう。

■ T12男子走り幅跳び

9名が出場した視覚障がいクラスT12男子の走り幅跳びでは、前半3回の試技の記録によって、8名が後半に残る。つまり、1人だけが前半での脱落を免れない。後半に進めなかった唯一の選手は、昨年パリ大会の同種目で7m47の世界記録を樹立し、今大会も金メダル筆頭候補だったウズベキスタンのドニヨル・サリエフだった。前半3回の試技の全てでファウル、記録を残すことができなかった。

今大会優勝したのは、前半第3試技で7m30のビッグジャンプを披露した、アゼルバイジャンのサイド・ナヤフザデだ。1本目から6m99でトップに立ち、2本目で自己新となる7m28をマーク。そして3本目で出したばかりの自己新を更新する跳躍で他を引き離した。

ナヤフザデを追いかけていたのは、マレーシアのカルゲー・ウォン。第３試技でナヤフザデに続き、7m05の記録で２番手に。さらに日本の石山大輝が同じく第３試技で出した6m85でトップ２人を追いかけていた。

後半、試合が動いた。前半の記録により８番手の選手から試技を行う。最終試技順ナヤフザデの４本目は、ファウル。５本目は試技をパスして６本目のみにかけていた。一方、ウォンの４本目も6m61と、振るわず、５本目はファウル。やはり最終試技で勝負をかけることになった。そんな中、石山が躍動する。第４試技で6m97と前半３回を上回る好記録を出して、トップ2人に迫る。５本目はファウルとなり、石山もまた、最終試技での記録によって順位が決定する展開である。

試技順では３番手の石山が３人の中では最初に６本目に臨む。誰よりも長距離の助走で跳躍する石山が、さらに助走スタート位置を50cm後ろにずらして、43.5mの距離を疾走した。ギリギリで踏み切ると、美しいはさみ跳びで空中を歩くようにして着地した。7m08。２番手につけていたウォンの7m05を超えて2位に浮上する。追い込まれたウォンの跳躍は6m93。この瞬間、石山の銀メダルが確定した。最後に跳躍したナヤフザデは再びファウル。7m30の記録で優勝したのだった。

「自己ベストでの世界選手権初優勝は、最高だった。３ヶ月後にはパリパラリンピックがあります。東京パラリンピックでは銅メダル、次はパラリンピックの金メダルを目指します」（ナヤフザデ）

世界選手権での初メダルを獲得した石山は、最終試技前、正座して順番を待っていた。「インターハイの時に正座して集中したことを思い出し、久しぶりにやってみました。うまくいきました」

前半で記録なしのまま終わった世界記録保持者のサリエフから、後半ピットに向かう石山に「グッドラック・ブラザー」とエールが送られた。自国開催のホームアドバンテージ、王者からの応援を一身に受けて、石山は大きく飛躍した。

■ T13男子100m

視覚障がいクラスT13男子100m決勝が行われ、アルジェリアのスカンデルジャミル・アスマニが10秒44の大会新記録で優勝。日本の川上秀太が自身の持つアジア記録を更新する10秒70で銀メダルを獲得した。

このレースには、2023年に10秒37の世界記録を樹立したノルウェーのサルムアゲセ・カスハファリも出場、王者の走りに誰もが注目していたが、1人飛び出したのはアスマニだった。スタートからのスムーズな加速でアスマニを追いかける川上を、王者・カスハファリがゴール手前でとらえたかに見えたが、0.09秒差で川上が逃げ切った。

アスマニは、「100mで優勝することを、ずっと待ち侘びていました。ケガなどもあり、400mに出場していた時期がある。ようやく100mに戻ってきての優勝は格別です。アルジェリアには1歳の娘が待っている。彼女に今日のメダルをプレゼントしたい」と、語った。

初めての世界選手権で銀メダルを獲得した川上は、フィニッシュするとガッツポーズで喜びを表現した。「前日の予選でスタート直後に姿勢が崩れてしまったところを修正して決勝に臨んだことで、タイムを上げることができました」。昨年、パリ大会に出場予定だったが、直前のケガにより欠場した。今大会、初めての大舞台でメダル獲得、そしてパリパラリンピックへの出場内定を確実にした。

「ようやく世界の舞台のスタートラインに立てた。川上が、日本が、パラ陸上の中でももっともスピードが速いクラスで世界と互角に戦えるということを見せられた。とはいえ、今日、アスマニ選手に負けたことが、非常に悔しいという思いがある。パリパラリンピックに向けて、基礎的なスプリント力と、スタートからの加速局面でのスキルを磨いて、さらなる記録向上を目指します」と、力強く語った。

■F53女子円盤投げ

下肢に障がいがあり、車いすを使う選手を対象とするF53クラスの女子円盤投げ決勝には4選手が出場した。競技は投てき台を使用し、1選手ずつ6投連続で試技を行う。東京パラリンピック金メダリストのエリザベス・ロドリゲスゴメス（ブラジル）が6投目に大会新記録となる17m22をマークし、大会3連覇を果たした。日本の鬼谷慶子は世界選手権初出場ながら、2投目にアジア新となる14m49を投げ、銀メダルを獲得した。自己記録を3m06も伸ばすビッグスローで、初のパリパラリンピック代表内定も大きく引き寄せた。

優勝したロドリゲスゴメスは、「大好きな日本で、世界選手権3個目の金メダルを獲れて、本当に嬉しい。パリパラリンピックでも金メダルを獲得したい」と笑顔で話した。

バレーボール選手だったが、病気のためパラスポーツに転向。車いすバスケットボールで北京パラリンピックに出場後、2011年からパラ陸上の座位投てきを始めた。昨年秋に世界記録(17m80)を更新するなど進化を続ける女王だが、現在59歳。「私もいつか引退するときがくると思う。鬼谷選手のように新しい選手が競技を始めてくれて、とても嬉しい。座位投てきをもっと広めていってほしいです」と期待を寄せた。

その鬼谷は、「2位に入ってパリパラリンピック出場を決めるのが目標でした。練習投てきからいい感触で、『今日はいけるな』と思いましたが、ちょっと信じられない記録。初の世界選手権で緊張するかと思ましたが、楽しみのほうが大きく、精神的にもいい状態で入れました」と穏やかな笑顔で振り返った。

大学で陸上競技に取り組んでいた約9年前、難病を発症し、6～7年ほど療養生活を送った。リハビリの過程でパラスポーツと出合い、座位の円盤投げに初挑戦したのは2022年のこと。昨年から競技として本格的に取り組みだすと、急成長。同年10月には初の日本代表入りを果たすと、アジアパラ競技大会（中国・杭州）で、11m01を投げ、銅メダルを獲得した。

その後の冬季練習で取り組んだ筋力強化がこの日のビッグスローにつながった。今後の目標として、「パリで15mの記録を目指し、しっかり練習すること。そして、自分が競技をすることで、誰かのチャレンジする背中を押していけたら嬉しいです」と言葉に力を込めた。

大会4日目、日本はほかに中西麻耶（T64女子走り幅跳び）、佐々木真菜（T13女子400m）がともに銅メダルを獲得した。

Competition Schedule and Results

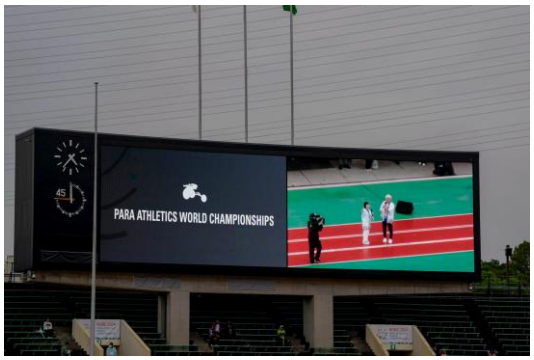
GO KOBE 2024!

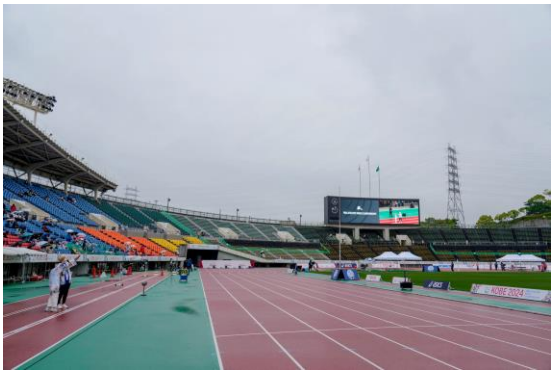
両腕欠損の高校生
ドローンで大会の空撮に成功！

大会3日目、5月19日に、生まれつき両腕が肩先までしかない神戸市の高校3年生、宮崎美侑さんによるドローン空撮のイベントが行われた。

宮崎さんはコントローラーのスティックやモニター画面を足の指で巧みに操作。競技場横の小高い丘の上からドローンを飛ばし、イブニングセッション開始前の競技場内を上空から撮影することに挑戦、見事に成功させた。

ドローンに搭載した望遠レンズ付きカメラで撮影した空撮映像が場内の大型ビジョンに投影されると、競技場内で見守っていた大会実行委員会の増田明美会長や大会PR隊長の三津家貴也さん、詰めかけた観客から歓声が上がった。





1分ほどの撮影後、ドローンを無事にスタートポイントに着地させ、約15分の飛行を終えると、宮崎さんはホッとしたような笑顔を見せた。

挑戦後、モニター越しに空撮映像を見ていたという宮崎さんは、「けっこう観客が多く、手を振っている姿が見られて嬉しかったです」と振り返った。

通信障害によって、一度上昇したドローンが自動で元の位置に戻ってくるというトラブルに見舞われたた。が、宮崎さんは冷静に対応し、再起動によってドローンを再上昇させ、成功につなげた。

この日は他にもさまざまな挑戦があった。小雨が降り続く、飛行には難しい条件下。この日使用したのは、遠方からの撮影に対応する、望遠レンズ付きのカメラを搭載したドローン。直径約1.6m、重量は10kgとかなりの大型だ。宮崎さんがふだん飛ばしているドローン（約900ｇ）のおよそ10倍で、大きいほど操作は困難になる。しかも、関係者だけでなく、不特定多数の人々が見守るなかでの空撮は初めてだった。

「いつもより緊張しました。でも、緊張感は楽しみにもなる。今日は本当に楽しかったです」

宮崎さんは中学生時代からドローンの操縦や撮影を行ってきたが、昨年7月、難関といわれるドローン操縦の国家資格「一等無人航空機操縦士」試験に史上最年少の16歳で合格した。現在はドローンを活用し、ユニバーサル社会に貢献することなどを活動目的とするユニバーサル・ドローン協会（神戸市）に所属。これまでにも花火大会の撮影などを成功させている。

宮崎さんを中学時代から指導し、この日も隣でサポートした国際ドローン協会の代表理事、榎本幸太郎さんは、「トラブルがあるとパニックになる人も多いが、美侑ちゃんは知識や技術があるだけでなく、危険を予知し、不測の事態にも淡々と対処できる能力も高い」と目を細めた。

宮崎さんはこの日に先がけ、神戸2024大会の視覚障がいクラスのレースを観戦したという。「伴走の方とのレースがすごく精度が高かった。二人が一体になって競技する様子を目の前で見られて、とても興味深かったです」と目を丸くした。

「今後は、観光名所などを撮影して、気軽に外出しにくい人たちにもその映像を届けたいです。例えば、布引ハーブ園や王子動物園などに興味があります」。

榎本さんは、「高齢社会に向けてドローンは生活を便利にするための利用など可能性は高いが、障がいのあるドローンパイロットはまだ少ない。美侑ちゃんの活躍が誰かの挑戦のきっかけにもなってくれたらと願っています」と期待を寄せた。